

資料1 『問題のある子ども 何が、神経症を引き起こすのか』より

『The Pattern of Life』 1930年 アルフレッド・アドラー著 ウォルター・ベラン・ウルフ編
坂東智子訳 興陽館

P8

はじめに

編集者ウォルター・ベラン・ウルフ：1900～1935

オーストリア出身の医学師、精神分析医（カウンセラー）、作家。

ウィーンで生まれ、アメリカで教育を受け、大学院進学のためにウィーンに戻る。ウィーンで、アルフレッド・アドラーの助手になり、その後ニューヨークに戻って、アドラー心理学を使ったカウンセリングを行う。将来を大いに期待されていたが若くして亡くなった。『どうすれば幸福になれるか』（一光社、1994年）などの著書がある。

I

人間の本質を理解するには、人間のさまざまな「行動パターン」を理解する必要があります。アルフレッド・アドラー（1870～1937年。 中略 1935年にアメリカに移住）は、そうした行動パターンを理解するための秘訣を紹介し、現代心理学に比類のない貢献をしました。わたしは「個人心理学」の手法を学んでいる身ですが、本書—英語で発表された事例集—を編集する前は、彼の手法を知るには、彼や教え子たちがドイツ語で発表した事例を研究するしかありませんでした。ですが、事例の多くはヨーロッパ特有の環境で起きたものなので、アメリカの読者にはわかりにくいように思えます。

とはいえ、「個人心理学」の原則と実践は、世界のどこでも有効です。それについては、アメリカ国内の事例のみを扱った本書を読んでいただければ、わかってもらえるはずです。本書では、十分な数の事例を通じて、人間の行動には根本的な一貫性（不変性）があることを示しています。アドラーはウィーン在住の心理学者、教育者で、1929年にアメリカに滞在したときに、ニューヨーク市のニュー・スクール・フォー・ソーシャル・リサーチ（現ニュースクール大学）で、一連の講義を行いました。講義では、アドラーに相談が寄せられた「問題を抱えている人（子ども）の事例」を取り上げ、その事例について分析し、解決策を示しました。講義で取り上げる事例を事前に選別するとか、制限するといったことはしていません。本書は、その講義を再現したものです。講義で取り上げられた事例は、アメリカの大都市の小学校や児童相談所でよく見られるものです。事例のなかには、ニューヨークの精神分析医（カウンセラー）によって相談が寄せられたものもありますが、多くは、ニューヨークの小学校の教師によって持ち込まれた、彼らが自分では手に負えない「問題のある子どもたち」の事例です。

そうしたカウンセラーや教師たちは、自分のクライアントや問題のある子どもを、アドラーがウィーンに設立した児童相談所のために彼自身が作成した「問題のある子どもの調査マニュアル」に従って、徹底的に調べ上げました。本書では、簡素化のために小見出しはつけていませんが、本書の構成は、個人心理学を研究するための事例が欲しいと思っている方なら、どなたでもすぐに理解できるものになっています。アドラ

一の講義は次のような段取りで行われました。まず、講義にむけて、クライアントや問題のある子どもを調査したカウンセラーや教師たちが、一定のフォーマットに従って、クライアントや子どもの症状（問題）、プロフィール、経歴（生育歴）などを記した資料を用意しました。アドラーは、クライアントや子どもたちに会ったこともなければ、事前にカウンセラーや教師から話を聞くこともしていません。講義の場で、症状（問題）などを記した資料を一文ずつ読みながら、彼がクライアントや子どもについて推測したことを述べました。ときには、資料の記述にミスリードされたこともありましたが、ほとんどの場合、子どものパーソナリティを生き生きと描き出しました。大抵は、子どもの精神状態を正確に見抜いて、カウンセラーや教師たちの調査結果を予測しましたし、つねに子どもを取り巻く人たちを優しく思いやりながら、子どものそれまでの人生を明らかにしました。

アドラーが精神医学を駆使した見事な推理力を発揮して、症状（問題）を手際よく分析した後は、子どもが置かれた状況について簡単に説明し、子どもへの心理療法やアドバイスの狙いをざっと説明します。その後、子どもの親御さんに講義の場（教室）に入ってもらい、受講者たちの前で、アドラーが質問し、アドバイスを提供します。さらに、子ども自身にも入ってもらい、その子どもが置かれた状況を、アドラーが本人にわかりやすい言葉で説明します。子どもへの対応は、その後は、資料を作成した教師やカウンセラーに任せられ、彼らがアドラーが講義の中で説明した解決策を実行することになります。ときには、のちの講義の席で、以前に取り上げた子どものそのあとの様子が報告され、改善が見られたと伝えられたこともありました。

とはいえ、すべての子どもに改善が見られたわけではありません。教師やカウンセラーが子どもの考え方を改めようと努力したのに、親御さんの神経症が治らず、理解や協力が得られなかったせいで、子どもの状態に改善が見られなかったケースもありました。あるいは、家計が苦しかったり、子どもが別の疾患にかかったり、子どもが神経症を発症した状況を変えられない事情があったりしたために、改善が進まないケースもありました。一時的に改善したものの、新しい環境に入って新たな問題に見舞われたために、親御さんが子どもの言動の意味をもっとよく見抜けるようになるまで、あるいは子どもが神経症のトリックを使い果たすまで、心理療法を続けることが必要になったケースもありました。また、集中的なカウンセリングと指導が功を奏して、著しい改善が見られたのに、古いタイプの教師が担任になるという、どうすることもできない問題のせいで、逆戻りしたケースもありました。その教師は、子どもを非難し、やる気を失わせたことで、何ヶ月にもわたる辛抱強い取り組みの成果を、ほんの数日で台無しにしたのです。とはいえ、講義で取り上げた子どもの多くに明確な改善が見られ、それまでの行動パターンを完全に変えた子どもも少なくありません。

読者の皆さんには、この本が心理療法についての総合的な解説書ではなく、子どもの神経症のあらましと症状（問題）の解釈のしかたを示した本であることを、お伝えしておいたほうがいいでしょう。この本の一番の価値は、子どもや大人たちの症状（問題）の改善に取り組んでいるすべての人々に、人間の行動のさまざまなパターンを紹介していることです。症状（問題）を改善するテクニックは、こうした本を通じて教えることはできません。エッチングの銅版画作りから印刷までの物理的、化学的な作業を示した本で、エッチングのテクニックを教えることができないのと同じです。この本を通じて、読者のみなさんに、人間を「レッテルを貼られた静的な機械のようなもの」とみなすのではなく、「動き、生き、目標を達成しようとする存在であり、複雑な世界で、存在意義と安心感を求めて努力している存在」とみなすよう働きかけることができたら、この本は目的を果たしたことになるでしょう。

II

中略

P40

大人の神経症は、子どものころの「問題」として始まります。「問題」のある子どもはだれもが、将来、神経症になる可能性があります。ですが、問題のある子どもは、問題のある環境で育っただけかもしれません。そういう子どもたちは、言ってみれば、劣悪な環境に対して正常に反応したのです。問題のある子どもは、人間性が最もはなはだしく無視されているように見える環境で、最も多く見られます。子どもの精神衛生の問題は、教育の問題でもあり、教育の問題には、アドラーが熱心に取り組んできました。彼は、個人心理学の手法を使って、子どもの「行動の逸脱」の防止に努めています。これは、アドラーによる現代社会への多大な貢献と言えるでしょう。他の精神分析医も、神経症が子どものころに始まることに気づいていましたが、アドラーは、子どものころの「行動の逸脱」を調べる方法ばかりか、それを未然に防ぐ方法も開発しました。そんなわけで、心理療法の一分野として始まった「個人心理学」は、心理療法の範囲を超えた分野に発展し、社会学と教育学の土台としての役割を果たすことになったのです。

では、子どもの神経症はどんなときに、どんなところで始まるのでしょうか？わたしたち個人心理学の研究者は、神経症は間違ったライフパターンの不快な産物だと考えています。言い換えれば、子どもは、劣等感を抱いた状況（場面）を誤って解釈し、無意識のうちに、現実や、客観性、共同生活のルールに反するような埋め合わせのしかたをしたために、対処不可能な障害に直面し、新しいパターンを生み出したということです。その新しいパターンが「神経症」というわけです。子どもが神経症になることは、自分の問題を解決できないことを正当化しようとしている、あるいは、問題を避けて通るための精神的な迂回路を作ろうとしていることを意味します。なかには、幻覚を引き起こすという形で、問題の存在自体を否定するようなパターンを生み出す子どももいます。また、神経症になることが、問題や障害が存在しなかったかつての状況を取り戻そうとしていることを意味するケースもあるでしょう。あるいは、神経症になることで、子どもの不具合の原因となった人たちへの復讐を果たすというケースもあります。

IV

中略

P58

クライアントが「問題のある子ども」の場合は、アドラーの手法はシンプルながら、驚くほど効果があります。カウンセラーは、子どもについての調査資料を読んだら、あるいは母親から子どもの問題について説明を聞いたら、たいていは、子どもの問題の本質を見抜きます。問題のある子どもたちの行動パターンはシンプルなので、行動が何のサインなのかを読み取れるカウンセラーなら、対処法もすぐにわかります。問題のある子どもたちは、本書で取り上げているケースからもわかるように、前にお伝えした「子どもの劣等感を強める要因」のどれか、あるいは全部によって、自信を失っています。子どもの問題は、たいていの場合、親に原因があり、親がさらなる困難や障害を持ち込むことで、子どもが成長の正常なルートをたどるのを妨げています。

ですから、問題のある子どものカウンセリングでは、親や担任教師を教育して、子どもの行動パターンを理解してもらうことと、子どもの自信を失わせている要因をできる限り取り除くことにほとんどの時間を費

やします。個人心理学が理にかなっていて平易であることは、ほとんどの子どもが個人心理学の手法の効果を理解し、なかには個人心理学の考え方を理解できる子どももいることから、確かだと言えるでしょう。問題のある子どもがまだ幼い場合は、親やカウンセラーが、子どもの自信を失わせている要因を取り除くことで、問題は解決します。子どもがもっと大きい場合は、「勇気」を養うためのトレーニングや、「自立」を促すトレーニング、「共同体感覚」を備えるためのトレーニングを行います。個人心理学の手法で、子どものすべての問題行動を改善できるわけではありませんが、親や担任教師に、カウンセラーの取り組みにきちんと協力するよう教えることができた場合は、問題がかなり厄介な場合でも、効果をあげることができます。

アルフレッド・アドラーは常々、小学校は、予防のためのメンタルヘルスセンターとして、理想的な場所だと語っています。学校では、どの子どもも「クラスに属し、タスクを抱えている」という社会的な状況に置かれ、いわば「社会」の縮図のような世界に直面しています。アドラーの手法ー子どもへの接し方や子どもの心を動かすテクニックーを学んだ教師たちは、クラス運営がかなり楽になったと感じています。子どもの行動に、神経症の行動パターンが見られることに気づくことが、子どもを成長の正常なルートに戻すための第一歩です。子どもたちは、自分を理解してもらい、励ましてもらったら、植物が太陽と雨と適した土壌に反応するのと同じくらい、確実に応えるものです。そして親や教師にとっては、子どもを理解し励ますことは、子どもをだめなタイプと決めつけ、自信をなくさせるのと同じくらい簡単なのです。アドラーの心理学では、「人はみんな、どんな子どもでも成し遂げられる」という考え方を第一の指針に据えています。この考え方に限界があることは、そのことに気づいた人たちにはよく知られていますが、この考え方は、人間関係を築くうえでの実用的な原則として、計り知れないほどの価値があります。教師が子どもを悪い子だとか、頭が悪い、怠け者だ、神経質だと決めつけても、そうすることで成し遂げられることは何一つなく、子どもを実際に頭の悪い子どもや、怠け者の子どもにしてしまうだけです。子どもは、たいていの場合、自分に期待（予測）されている通りの行動を取るものです。子どもを、まるで「人間社会のしくみに適応できている（慣れている）子ども」のように扱っても、何の損失もありません。そしてそうすることで、たいていは、信じられないような効果をあげることができるのです。

これまで「個人心理学」について簡単に紹介してきましたが、この序文は、悲観主義者や意気地のない人々のためのものではありません。心のなかに、いずれは「炎」へと燃え立つような「火の粉」を抱えている読者のみなさんや、「人間には、人間であることに幸せを感じる権利がある」と考えている読者のみなさんが、ご自身の研究を続けるうえで、この序文が励みになれば幸いです。これからご紹介する事例は、読者のみなさんが、人のライフパターンを読み取る方法を理解し、まるで熟練した演奏家が交響曲の楽譜を読み取るように、ライフパターンを読み取れるようになるのに役立ちます。「個人心理学」は、学問というよりも「技術」です。これを使いこなすには、創造的な「直感力」と、人類の歴史を通じて、偉大な詩人や優れた教師たちを行動へと駆り立ててきた、人間の欲求への「共感力」が必要でしょう。充実した人生を送らず、生きることの苦悩と感喜を共有してこなかった人は、この技術をマスターしたいとは思わないかもしれません。ですが、思考ができる人ならだれでも、「個人心理学」の原則を使いこなす「よい技術者」になる力を備えています。

資料2 野田俊作の補正項より

①函館（2） 2009年08月02日（日）

午後から一般向けの講演をしたが、函館市内ではなくて、北隣にある七飯（ななえ）町というところの「文化会館」を使わせてもらった。箱物行政というもので、とても立派な会館がある。

2時間話をして1時間質疑応答をしたのだけれど、質問の中に「空気が読めない子をどう援助したらいいか」というのがあった。質問者は学校の先生だと思う。質問者が誠実で熱心な先生であることは疑わないのだが、問題の立て方が間違っている。つまり、「空気が読めない」というのは、その子自身が困っていることではなくて、先生が困っていることだろう。そうであるとすれば、治療を受けなければならないのは、その子ではなくて先生だ。

これは、統合失調症の患者さんの場合に似ている。統合失調症者は病識がなくて、自分を病気だとは思っていない。だから、家族などが病院に連れてくることになる。患者さん自身は「私は病気ではありません」と言う。さて、私はどうするかというと、「あなたは幸福ですか？」と問いかける。誇大妄想でも持っていないかぎり、幸福ではないだろう。では、なにが患者さん自身が困っている問題か。それを聞き出して、それについて援助する。

「空気が読めない」子どもも同じで、子ども自身がなにに困っているかを知らないでは、援助ができない。「空気が読めない」というのはたまたまの一例で、他にも、「乱暴な子ども」だの「集団に入れない子ども」だの、はてはアスペルガー症候群だのADHDだの、外から見た「診断名」でもって援助計画を立てようとするのは、「問題の立て間違い」だ教師（あるいは家族、あるいは治療者）の頭の中に「正常」な人間像があって、そこから見ると対象者は「異常」なので、その人を「正常」な人に改造しようとたくらんでいるということだ。この「たくらみ」自体が病気なのだ。

これは、精神医学や臨床心理学がかかえている、根本的な二つのパラダイムにかかわっている。ひとつは、社会が望む「正常」に人々をあてはめる道具として科学技術を使うという立場、ひとつは、個人が望む「幸福」に向かって科学技術を使うという立場だ。アドラー心理学は、完全に後者の立場に立つので、「空気が読めない子をどう援助したらいいか」というのは、質問自体が間違っていると考ええる。しかし同時に、アドラー心理学は、個人の幸福は、その人が他者に貢献することを通じてしか実現できないと考えているので、実際の治療になると、結果的にはその子の「空気の読めなさ」を改善する援助をすることになると思う。「それじゃ、結局は同じことじゃないか」とおっしゃるかもしれないが、まったく違う。ある人を、その人自身が望む幸福に向かえるように援助して、その結果、その人が他者と調和して暮らせるようになるのと、ある人を、他の人が望むいい人に改造するために矯正するのとでは、まったく同じことではない。アドラーがもっとも深いところで望んでいたことは、「人が人を道具として扱わない」ということで、自分の好みに合わせて他人を改造するのは、たとえ善意から出ていても、やはり人を道具として扱うということではない。（後略）

②子育て入門講演会 2009年01月18日（日）

（前略） 子育てについて入門講義をした。聴衆の多くは若い母親だ。このごろ世代交代が進んで、知らない方が多くお見えになるので嬉しい。今日の話の要点は、以下の3つだった。

- ・第1に、子育てのゴールを意識すること。
- ・第2に、責任をもって貢献して生きるように子どもを勇気づけること。
- ・第3に、家族会議をして、「万機公論に決すべし」で、すべての問題について話し合って決めること。

そのあとで、質疑応答セッションをした。

ある母親の質問。「うちの息子は非行をしているのですが、近所の人々に恥ずかしくて、顔向けができなくて困っています。どうすればいいのでしょうか?」。以下のように答えた。「あなたは、息子さんの最後の味方なんです。たとえ世界全体が彼の敵になっても、あなたは彼のことを誇りに思ってください。決して息子さんの敵になってはいけません。息子さんのパーソナル・ステレンクスを探してください。それについて、息子さんと話してください。彼の否定的な面を取り除こうとしないで、肯定的な面を伸ばそうとしてください。つまるところ、あなたは息子さんにとってただ一人の母親なんですよ」。

こういう質問は、日本の伝統的なメンタリティと関係がある。日本人は、「恥」を道徳の標準としてきた。したがって、親は子どもが世の中に「恥ずべき」ことをしたとき、子どもを勇気くじきしてしまう。その一方で、日本には、犯罪者になってしまった息子をかばう母親についての美しい物語がいくつかある。だから、上のようなレトリックは、日本人の心に響くところがあると思う。

別の母親の質問。「息子は、アスペルガー症候群だと診断されています。彼はとっても頑固で、言うことを聞こうとしません。アドラー心理学は、そんな子にも使えますか」。以下のように答えた。「世界中のすべての男の子は頑固ですし、親の言うことを聞きません。しかも、アドラー心理学は効果的です。ということは、あなたの息子さんにも効果的でしょう。世の中には、速く学ぶのが好きな子どももいますし、ゆっくり学ぶのが好きな子どももいます。あなたの息子さんはゆっくり学ぶのが好きかもしれません。でも、必ず学びます。尊敬して、信頼して、ポジティブな側面に関心に向けて、あなたや家族への貢献に感謝して、あらゆることがらについて彼とじっくりと話し合ってください。私は、彼はすばらしい人に育つと確信しますね」。

これは、日本だけでなく、現代の世界のどこにでもおこっている問題だ。子どもが病気だと言われたとき、両親は勇気をくじかれてしまって、自分の子どもは特別で、普通の方法で育てるのは不可能か、少なくとも、きわめて難しいと考えてしまう。そうして、子どもの不適切な行動をすべて病気のせいだと考えて、「しつけ」をあきらめてしまう。子どものネガティブな側面ではなく、ポジティブな側面に注意を向けなければならない。そうすれば、子どもとの間に協力的な関係を築くことができる。そして、責任を持った貢献的な生活に向けて子どもを勇気づけはじめることができる。（後略）

③みんなが所属できる社会を 2011年05月28日（土）

福岡へ来ている。今日と明日は、アドラー心理学基礎講座応用編だ。15分ほどミニ講義をして、何人かの方に出てきていただいて思いつくことを話していただいて、そこからキーワードを拾ってホワイトボードに書いておく。次の時間に、そのキーワードをもとに、その時間のテーマ（たとえば「勇気づけ」）の講義をする。最後の1時間は質疑応答をする。これは、なかなか疲れる。

学校の先生が何人か来ておられて、問題児をどう扱えばいいか困っているという話をなさる。「それは、問題の立て方が違うでしょう」と私は言った。子どもが問題を起こすのは、クラスに所属することに失敗しているからだ。そうであるとすれば、健全な子どもたちの助けを借りて、その子をどのようにしてクラスに所属させるかを工夫すべきであって、問題を起こしている子に注目して、どうしてその子の問題行動をやめさせるかを工夫すべきではない。だって、その子は、問題行動によってようやくクラスの中に居場所を見つけているわけで、それを奪ってしまったら、余計に居場所を失って、もっとひどい問題行動をするだろう。問題行動でない方法で所属できるように、教師も工夫しクラスも工夫し問題児自身も工夫すべきだが、健全児の方が余力があるのだから、健全児に工夫してもらうのがいい、「Aくんは、みんなのお友だちになりたいんだけど、どうすればお友だちになれるかわからないみたいです。さて、みんなは、どういう風にしてあげられますか？」と問いかけるべきだ。

しかしまあ、その前に、教育が目標を失ってしまっているのが、先生がたも大変だろう。教育は、未来の国を作るためにある。未来の国がなくては、未来の国民の幸福はない。いまの教育は、未来の国を作るということを言わないで、未来の人々の幸福だけを言っているが、それは、未来の会社の繁栄のための工夫をしないで、未来の給料の話をしているようなものだ。アドラー心理学がめざしているのは、健全者も障害者も、能力のある人も能力のない人も、変凡人も個性的な人も、みんなに居場所があり、みんなが各々の在り方で所属できるような世界を作ることだ。標準なり平均なりに合わせて、人々を切りそろえる社会ではない。みんなが同じことをする必要はまったくない。違うことをして分業をする。だから、学校でも、ちょっと変わった子にも居場所があるように、教師も工夫し、健全な子たちにも工夫してくれるように働きかけるべきだ。変わった子を普通の子にさせるように努力するのは「問題の立て方が違う」のだ。

私は、ある種の変った子だった。さいわい、先生たちがそれを許容してくださったので、いつもクラスの中に居場所があった。流行り歌は知らなくてストラヴィンスキーやバルトークを聴いていたし、マンガや小説でなくてドイツ語やインドネシア語の文法書を読んでいたり、怪獣映画もハリウッド映画も見なくてB級映画やC級映画しか見なかった。だから、ごく少数の友だちしかいなかったし、それで別に不自由はなかった。一方、違う方向に変わっている子たちもたくさんいて、それはそれで許容されていたので、いまみたいな問題（たとえば暴力的になるとか）はおこらなかった。子どもの数も多かったし、世の中がそんなに窮屈じゃなかったからね。

基礎講座応用編の最初の時間に言うのだけれど、精神的に健康であるというのは、平均概念ではなくて価値概念で、みんなと同じであることではなくて、共同体に対して貢献的であることをいうので、すべての子

にその子なりに貢献的である生き方を選ぶように勇気づけるのが、教育の使命だ。

アドラー心理学はシステムタイズされた知識で、全体が一体構造をしている。だから、たとえば正常概念だとか、たとえば不適切な行動の目的だとか、たとえばよい組織の作り方だとか、そういうことがすべて単純な基礎理論と関係している。教室で暴れる子どもがいた場合、まずアドラー心理学の原理にさかのぼって考えるべきだ。そうしないで、それまでの既製の知識で考え始めるので、ものが見えなくなってしまう。アドラー心理学を学ぶためには、それまでに学んださまざまなことをいったん「カッコ入れ」して、アドラー心理学だけで考える練習をしなければならない。

④子どもの喧嘩について 2013年06月22日（土）

金沢に来ている。珍しく今日は「アウェイ」で、アドラー心理学の集会ではない。日本保育協会石川県支部といういかめしい名前の団体に招待されて、この地方の保育士さんにアドラー心理学の話をした。100人以上の若い女性の前で話をするなんて、めったにないことなので（人数の方？ 年齢の方？）、ちょっと緊張したな。

今年は最初にホワイトボードにその日の目次を書くという方法に凝っている。昨年まではスライドだったのだけれど、かえって自由に話ができない気がしたし、聴衆もスライドばかり見ている感じだし、ノートしたい人には不便だし、それで考えて、板書にしてみることにした。途中で板書するのは面倒だし、悪筆だし、だから最初に字のきれいな人を募って板書してもらおう。今日の目次は次のようだ。

しん	基本的 信頼感	「世界はいいところだ、人々は仲間だ」と思えるように
せつ	限界設定	「していけないことがある」とわかるように
ゆう	勇気づけ	賞や罰でなく、参加することを喜べるように
せん	選択肢を与える	「イエスカノーカ」ではなく複数から選べるように
たい	体験から学ぶ	たくさん体験して結末から学べるように
りよく	協力	争うのでなくて、力を合わせて暮らせるように
じ	自尊心	「私は能力がある」と感じられるように
ぞく	所属	いつもクラスの中に居場所があるように

左の列が記憶用のマントラで、真ん中の列のある音をあらわしていて、右の列がその説明だ。

1時間10分ほど話をして、その後20分ほど休憩してから質疑応答の時間にしたら、ものすごい数の質問が来た。1時間半の予定だったが、数分オーバーしてしまった。

子ども同士が喧嘩して、あまりにひどいときは、2人の先生が行って、ニコニコしながら両者を引き離して、各々の子に先生がついて、感情が落ち着くまで傍にいて、落ち着いたたら、「もう喧嘩しないでおれ

る？」と尋ねて、子どもが「うん」と言ったら釈放する。この方法を紹介したら、これについてかなり質問があった。「裁判をしてはいけない」というのは講演の中で言ってあったので、それは納得されたようなのだが、「子どもの話を聞かなくていいのか」とか「子どもの気持ちを受け止めなくていいのか」というようなことを尋ねた人が複数いた。

1) 子どもが感情的になっているときには話をしてもしょうがないし、2) 喧嘩の場合には落ち着いてから話を聞いても、どうせ「あのが悪い、僕が正しい」に決まっているし、3) それに何らかの判断を加えると、裁判することになってしまって、グループ・ダイナミクスを難しくする。だから、感情が落ちつくまで待って、ただ釈放する。何が何でも「子どもの話を聞く」とそれでいいわけではない。もちろん、子どもの話を聞かなければならない場合もある。喧嘩は、そうでない場合だ。

「気持ちを受け止める」というのは、日本語として意味不明なので、却下。ロジャーズ派の毒が、こんなところにまで回っているんだ。臨床心理学は科学的でなくてはならない。「気持ちを受け止めれば、きっと子どもは成長する」というのは「憲法9条を守っておれば、きっと外国は攻めてこない」というのと同じくらい迷信だ。

子どもの喧嘩そのものが悪いとは思わない。たくさん喧嘩をして育てばいい。ただ、1) 相手に怪我をさせたり、2) 自分が怪我をしたり、3) 物を壊したり、というのは限界を超えているので、そういう危険がある場合には上の方法で「タイムアウト」する。喧嘩でなくても、この3つのどれかが起こりそうな場合には、ニコニコしながら子どもをその場から引き離して、子どもが落ち着いてから、「あれはしてはいけません」と言う。それ以上たくさん説明する必要はないので、子どもが、「あれはしてはいけないんだ」と学べば、それでいい。子どもがもし「なぜ？」と尋ねれば、上の3つのうちのどれかを理由として簡潔に説明する。尋ねなければ、無理に説明しなくていい。アドラー心理学のこういうあたりが、私はけっこう好きだ。